

2023 年度
上智大学自己点検・評価
学外評価報告書

公開版

2024 年 3 月
上智大学自己点検評価
学外評価委員会

目次

1.	実施概要	1
(1)	実施目的	1
(2)	評価期間	1
(3)	評価実施の流れ	2
2.	学外評価委員について	3
(1)	学外評価委員の選定方針	3
(2)	学外評価委員一覧	3
3.	評価項目	4
(1)	学外評価での評価対象	4
(2)	委員ごとの評価項目	5
4.	書面評価結果	9
5.	学外評価委員会での評価結果	10
(1)	委員会実施概要	10
(2)	学外評価委員会の構成員	10
(3)	評価結果	11
I.	書面評価結果の共有	11
①	本学の学びの特徴について	11
②	多様な学生の受入れ・社会との接点	15
③	内部質保証(PDCA)の運用について	19
II.	意見交換	22
①	上智大学への期待等	22

はじめに

上智大学では自己点検・評価活動の一環として、学内での点検評価に留まらずに、大学を取り巻く多様なステークホルダーからの幅広い評価の視点を取り入れるべく、学外評価を実施し、教育・研究等の継続的な充実に向けて取り組んでいる。

今回の学外評価では、2022 年度に上智大学が自己点検・評価活動として実施した学内での点検評価に基づき、他大学教員・職員、中等教育関係者、企業関係者および教育行政経験者から構成される学外評価委員会を組織し、上智大学の教育研究活動や内部質保証活動に対する客観的な評価を実施した。

学外評価委員会として、上智大学が教育の質の向上に向けて取り組んでいる点を高く評価する。特に、基盤教育の取組をはじめとした教養教育・語学教育・専門教育の体系的な整理と連携の工夫は、学生の幅広い知識・能力を育む上で優れた取組と言える。また学生の「学び続ける力」を重視する上智大学の方針は、社会の変化に柔軟に対応できる人材を育成する上で極めて重要と考える。

また、各種調査やポートフォリオ活用等を通じた学修成果の可視化に関する取り組みも、学生の自己成長を促し、学びのその過程を明確に示す効果的な手段であると考えられる。

さらに、英語力を備えた学生や社会人学生の確保の工夫等、多様な学生の受け入れに向けた工夫や施策は、上智大学の国際性と多様性を高めるものとして評価される。

一方で、我が国の多くの大学がグローバルでの教育研究活動を強化していく中で、上智大学としての学びの特色や優位性をなお一層強化するとともに、継続的な内部質保証活動を通じて、上智大学としての教育の質を対外的に示していくことを期待したい。

今回の学外評価委員会での評価結果を参考しながら、上智大学には、今後とも自学の特色・強みをさらに発展させるとともに評価で明らかになった課題に対応することで、教育研究活動をはじめとする諸活動の継続的な充実と向上に向けた取組を推進されることを期待したい。

上智大学自己点検・評価学外評価委員会
委員長 村田 治

1. 実施概要

本学では、教育・研究等を継続的に充実させるため、自己点検・評価活動に取り組んでいる。2022年度に自己点検・評価活動の一環として、本学が実施した学内での点検評価に基づき、本学の教育・研究やその他の諸活動について、客観的な視点による更なる評価を行うべく、学外有識者による学外評価を実施した。

学外評価の概要を、以下に示す。

(1) 実施目的

学外評価の実施目的は、以下の2点である。

- ① 2022年度に実施した自己点検・評価結果として明らかになった本学の教育・研究活動の長所・強みや問題点に対して、学外有識者の幅広い視点からの客観的な評価を受けることで、本学の自己点検評価の客観性・信頼性の向上を図るとともに本学の教育活動等の更なる充実・向上につながる提言を収集するため
- ② 本学で確立・運用している内部質保証 PDCA サイクルおよび点検・評価プロセスに対して、学外有識者の第三者視点から質保証プロセスの適切性・有効性に係る評価を受けることで、内部質保証体制の更なる充実につながる提言を収集するため

(2) 評価期間

2023年10月～2024年3月

(3) 評価実施の流れ

学外評価は、各種資料に基づく①書面による評価および②委員会での評価により実施した。

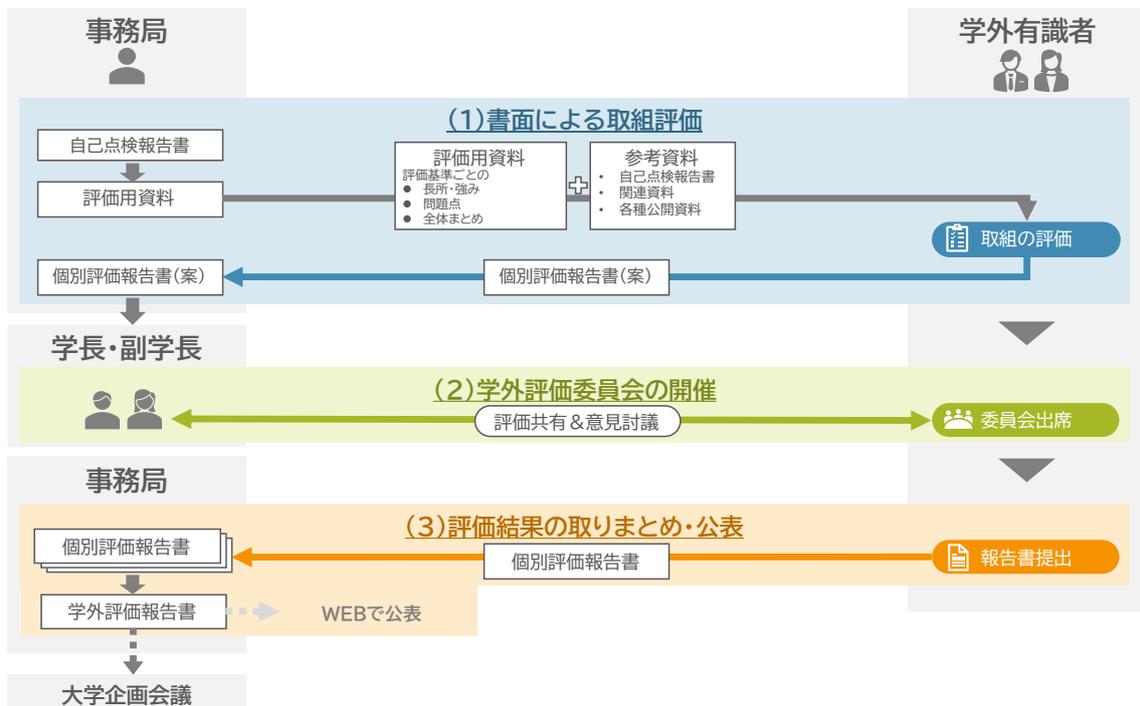
また、最終的な評価結果は、本学の PDCA サイクルで P(計画)の役割を担う大学企画会議において、学内の諸計画への反映を検討し、長所・特色の伸長や課題への対応を行う。

各評価の評価方法・実施時期・評価手順、および学外評価の流れの全体像を以下に示す。

図表 1 評価方法・実施時期・評価内容

評価方法	実施時期	評価の手順
① 書面による評価	2023年 10月～12月	● 「評価用資料」、「自己点検・評価報告書」および各種関連資料に基づき、本学の教育研究活動の取組状況について評価を実施した。
② 委員会での評価	2024年2月	● 学外評価委員会における、書面評価結果の共有および意見討議による評価を実施した。
③ 最終評価	2024年3月	● 書面評価および委員会評価を踏まえた最終評価を実施した。

図表 2 学外評価の流れの全体像



2. 学外評価委員について

(1) 学外評価委員の選定方針

学外評価委員は、以下のような経験・知見を有する、①他大学教員・職員(もしくは経験者)、②中等教育関係者(高校の校長や教員など)および③学校関係者以外(例:商工会・企業・都道府県・地方自治体の非大学関係者、文科省・各種認証評価機関・私学関連団体等の教育行政関係者、非営利法人・国際機関等の職員、もしくはそれらの経験者)に該当する委員を選定した。

- 教育・研究・社会連携・管理経営等の大学の諸活動に関する専門的な知見及び深い理解を有する
- 大学に限らず、組織管理運営や意思決定プロセスに関する知見(出来れば大学の質保証に関する一定以上の知見)を有する

(2) 学外評価委員一覧

選出区分ごとの学外評価委員の一覧を以下に示す。

図表 3 学外評価委員名簿

(敬称略・選出区分別)

	選出区分	氏名	所属・役職(当時)
委員長	①他大学教員・職員 (大学教員)	村田 治	関西学院大学 前学長 中央教育審議会大学分科会 副分科会長
委員	①他大学教員・職員 (大学職員)	山本 幸一	明治大学 研究推進部 研究知財事務室 職員
委員	②中等教育関係者	三好 彰	広島学院中学校・高等学校 前校長
委員	③学校関係者以外 企業関係者	宮間 三奈子	大日本印刷株式会社 取締役 人財開発部 ダイバーシティ& インクルージョン推進室担当
委員	③学校関係者以外 教育行政経験者	常盤 豊	多摩美術大学 理事 元 文部科学省 高等教育局長

3. 評価項目

(1) 学外評価での評価対象

学外評価では、本学の全学部等に係る教育研究活動の取組および本学の PDCA サイクル・点検評価プロセス等の内部質保証の取組を評価対象とした。

- ① 本学の全学部・研究科等に係る教育研究活動の取組
 - 教育課程・学修成果に係る特色・課題
 - 学生の受入れに係る特色・課題

- ② PDCA サイクル・点検評価プロセス等の内部質保証の取組
 - 内部質保証体制・点検評価活動に係る特色・課題

(2) 委員ごとの評価項目

評価の実施にあたっては、(1)で示した評価対象について、評価委員の有する経験・知見に応じて、さらに具体的な評価項目を設定した。

①本学の全学部・研究科等に係る教育研究活動の取組

本学の全学部・研究科等に係る教育研究活動の取組に関しては、「教育課程・学修成果に係る特色・課題」および「学生の受入れに係る特色・課題」を評価対象とした。

各評価対象で設定した評価項目を以下に示す。

教育課程・学修成果に係る特色・課題

評価項目番号	評価項目	評価担当委員				
		村田委員	山本委員	三好委員	宮間委員	常盤委員
Q1-1	<本学の学びの特色> 本学の学びの特徴(「基盤教育」「学びを学ぶ」「全学共通科目」の取組、「学び続ける力」や(専門科目を学ぶ前の基礎教養教育ではない)教養教育等)への意見・評価	○	○	○	○	○
Q1-2	<本学の学びの特色> 入学前科目「学びを学ぶ」等、高校までの学びからの転換を図る取組への意見・評価			○		
Q1-3	<学修成果の可視化に関する期待> 企業の視点からの、大学における「キャリア教育」への期待、採用学生の「学修成果の可視化」に関する期待(現状不足している点)・意見				○	
Q1-4	<その他学びの特色・課題> ・ 本学の学びの転換や学修成果の可視化に係る取組への意見・評価 ・ 他大学での実施上の工夫、継続性・効果の担保する上での工夫等についての意見	○	○			○

学生の受入れに係る特色・課題について

評価項目番号	評価項目	評価担当委員				
		村田委員	山本委員	三好委員	宮間委員	常盤委員
Q2-1	<p><多様な学生の受入れの取組> 本学における一般入試での英語力の高い学生を確保する取組、多様な学生を受け入れるための入試制度の整備に関する意見・評価</p>	○	○			○
Q2-2	<p><多様な入学者の受入れの取組></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ カトリック校の精神・理念の継承という点(特にイエズス会教育)視点からの、本学の高大接続の取組についての意見・評価・期待 ・ 「高大接続」の観点から大学に求めるものについての意見・評価 			○		
Q2-3	<p><大学院の入学確保・収容定員の充足></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院教育が重視されていく中での、本学の大学院充足状況への意見・評価 ・ 大学院の入学確保等の強化策についての意見 	○	○			○
Q2-4	<p><大学院の入学確保・収容定員の充足> 本学における社会人向けの大学院やプログラム等の取組状況を踏まえた、社会人学生の受入れの促進に向けた企業側からの意見・評価</p>				○	

②PDCA サイクル・点検評価プロセス等の内部質保証の取組

PDCA サイクル・点検評価プロセス等の内部質保証の取組に関しては、教育研究活動の継続的な改善を実現するために本学で取り組んでいる「内部質保証体制・点検評価活動に係る特色・課題」を評価対象とした。

「内部質保証体制・点検評価活動に係る特色・課題」として設定した評価項目を以下に示す。

評価項目番号	評価項目	評価担当委員				
		村田委員	山本委員	三好委員	宮間委員	常盤委員
Q3-1	<p><質保証体制の整備・運用></p> <ul style="list-style-type: none"> 本学で進めている質保証体制(PDCA の機能別に分化した会議体での運用等)に対する意見・評価 質保証活動の実質化に向けた、学内教職員の巻き込み方等の工夫に関する意見 	○	○			○
Q3-2	<p><中高側・企業側からの学修成果への期待></p> <ul style="list-style-type: none"> 近年の大学教育への評価や期待、今後大学に充実してほしい点等の意見 大学に学生を送り出す中高側や、学生の出口となる企業側から感じる「質を伴った教育」が見える他大学の事例提供等 			○	○	
Q3-3	<p><PDCA マネジメントの取組></p> <ul style="list-style-type: none"> 民間企業における PDCA 等の経営マネジメントから見た本学(あるいは大学全体)の質保証体制に対する評価 民間企業において経営層の PDCA マネジメントと各部署の PDCA マネジメントの連携において工夫されている点等の事例提供等 				○	○

③個別評価項目

その他、学外評価委員の経験・知見に応じて、個別に追加で評価項目を設定した。

個別評価項目を以下に示す。

評価項目番号	評価項目	評価担当委員				
		村田委員	山本委員	三好委員	宮間委員	常盤委員
Q4-1	<p><大学教育を通じて学生に期待する能力観> 本学が実施する学生調査を通じて明らかになった学生の多面的な能力の成長実感等に関して、大学教育を通じて学生が身につける広範な能力観(資質・能力・知識等)への期待</p> <p>(A)大学側の視点においては、学生の資質(性格・行動様式などのコンピテンシーに近い要素)をどの程度まで伸ばすことができ得るのか。等</p> <p>(B)中高側の視点においては、送り出した学生に、大学においてどのような能力を身につけてほしいと考えるか。等</p> <p>(C)企業側の視点においては、大学を卒業した学生が身につけた能力と企業が入社時に求めている能力が一致しているか。等</p>	○ (A)	○ (A)	○ (B)	○ (C)	○ (A)
Q4-2	<p><企業と協働した教育> インターンシップのあり方や、インターンシップ以外に企業が参画した形での協働教育のあり方に関する意見</p>				○	
任意回答	<p><その他> 本学の取組に係るご意見・期待</p>	○	○	○	○	○

4. 書面評価結果

「1. 教育課程・学修成果」、「2. 学生の受入れ」、「3. 内部質保証体制・点検評価活動」および「4. 個別評価項目」について、学外評価委員からの書面評価結果を以下に示す。

書面評価結果の詳細については、学内限り

5. 学外評価委員会での評価結果

(1) 委員会実施概要

学外評価委員会を開催し、書面評価結果の共有および意見討議による評価を実施した。
委員会の実施概要を以下に示す。

- 日 時： 2024年2月22日(木)15:00～17:00
- 場 所： 上智大学13号館 学院第2会議室
- 実施形態： 対面開催
- 議 題：
 - I. 書面評価結果の共有
 - ・ 本学の学びの特徴について
 - ・ 多様な学生の受入れ・学外との接点について
 - ・ 内部質保証(PDCA)の運用について
 - II. 意見交換

(2) 学外評価委員会の構成員

学外評価委員会の構成員を以下に示す。

学外評価委員

委員長	村田 治
委員	山本 幸一
委員	三好 彰
委員	宮間 三奈子
委員	常盤 豊

オブザーバー(上智大学関係者)

学長	曄道 佳明
学務担当副学長	伊呂原 隆
学生総務担当副学長	永井 敦子
高大連携担当副学長	西澤 茂
グローバル化推進担当副学長	森下 哲朗
学術研究担当副学長	岡田 隆

事務局

上智学院経営企画グループ

(3) 評価結果

書面評価結果の共有および意見討議での評価結果を以下に示す。

I. 書面評価結果の共有

① 本学の学びの特徴について

教養教育の体系的な整備

(村田委員長)

- ・ 上智大学が、リベラルアーツを含めた教養教育を体系的な学びとして整理している点は優れた取組であると考えている。
- ・ 全学共通科目の目標・枠組みが分かりやすく整理されている点は素晴らしいと考える。
- ・ 上智大学でも基盤教育と専門科目の連携が必要と認識されていると思うが、一方で、基盤教育と専門科目がクロスする部分である「展開知」の部分の説明・枠組みが分かりにくいと感じた。
- ・ また、理想を言えば、学科ごとにツリー、マップを整理していると思うが、基盤教育との関係性を整理するとなお分かりやすくなると感じた。

(山本委員)

- ・ 認証評価で求められるレベルで考えると上智大学の取組は問題ないと考えており、上智大学の基盤教育の取組は良い取り組みだと考えている。
- ・ ただ、一方で必修科目であることの是非について、現在提供している 4 領域以外の幅広い領域についても、全学共通科目として包含していくことを検討してもよいのではないかと考える。

「学び続ける力」の重視

(宮間委員)

- ・ 「学び続ける力」は社会人に求められる力でもあり、企業に入ってから学び続けることは重要な力となる。その意味では、上智大学が提供している「学びを学ぶ」は良い基盤であると考えている。
- ・ また、グローバル社会では、多様な人たちと円滑なコミュニケーションを取る力を身につける必要があるという点で、幅広い分野の知識をワンキャンパスの環境で学べる点は上智大学の長所でもある。多様な価値観を身に着けられるダイバーシティのある環境である点は素晴らしい。
- ・ 一方で、多くの大学がグローバル化していく中で、上智大学としての特異性・差別化は難しくなっているのではないかと考える。卒業生としては上智のグローバル性などをアピールしてもらえたいことを期待したい。

(三好委員)

- ・ イエズス会学校と中等教育の立場からコメントすると、「学び続ける力」は、イエズス会教育でも大切にしている視点であり、共通性のある点である。
- ・ 大学での学びが、高校までの学びからの転換を求められるほど大きく変わるものかどうかは分からないが、大学進学が新たなスタートであることをしっかりと意識し、大学での学びに期待感を抱かせるために、上智大学が提供している入学前科目「学びを学ぶ」の中で、生徒が入学前に学びの方法を学ぶことに意義はあると考える。
- ・ 昨今、高校でも生徒の基礎学力が低下している(学習意欲が低い)状況があり、自学自習の習慣がない生徒もいる。受け入れる生徒の質的な変化を把握して手当をする必要があると思う。

(村田委員長)

- ・ 上智大学が、学生の「学び続ける力」を重視していることは非常に評価したい。
- ・ OECD や EU 等のコンピテンシーで重視されている力や、企業の人事が重視している力はまさに「学び続ける力」であり、学び続ける力を身につけるには学生時代にいかに学んでいるかが重要となっている。
- ・ また、学歴を高めるほど学び続ける力を持っているという調査結果もあり、学生の学び続ける力を養うためには、大学が大きな役割を持っているものと考ええる。

学生のコンピテンシー評価および学修成果の「可視化」の取組

(村田委員長)

- ・ 学修成果の可視化という意味では、学修ポートフォリオシステムを学生の就職活動に連係している点も、出口を見据えた学修成果の可視化の取組であるので評価できる。

(山本委員)

- ・ 現在の卒業時実感調査では、正課活動に加えて正課外科目についても多くの項目を設けてアンケート調査しており、大学4年間の成長機会を幅広く捉えて調査している点が上智大学の特色であると考ええる。
- ・ 学生のコンピテンシー・学修成果として、PROGテスト等のアセスメントプログラムで民間企業等の視点からの社会人基礎力を測ることも大事だが、大学ならではの学修成果を測るという観点も重要だと考える。大学ならではの学修成果の視点としては「大学4年間で、なぜ学問するのか?」という点であると考ええる。学問は集中すること、継続すること、疑うこと、達成すること、という態度・姿勢から、他者理解(先人への敬意)、共同協力、役割分担、規範意識、感謝、包容力等の資質・素養などの総合的な人格の上に立って成り立つものである。学問に打ち込むことは、大学でしか経験できないものである。そのため、正課の授業にも価値があるとして、正課授業で養う力に注力した評価を取り、キャリア教育だ

けでなく、専門教育にも立脚したコンピテンシーを確認していくことも大事と考える。

(宮間委員)

- ・ 企業も会社として「求める人物像」もコンピテンシーに落とし込み、明確にしている。
- ・ 採用試験を受けに来る学生は、企業研究をして受験してくるので皆、企業のことはよく知っている。しかし、学生時代に自分が何を成し遂げたのか？という点は学生ごとに違いが生じる部分である。
- ・ 学修成果の可視化という点で、ポートフォリオ等で、学生が成績以外の要素として、学生時代に成し遂げた成果を見られるようになると良いと考える。例えば、美術大学の学生の場合も、自分の作品ポートフォリオがあって、自分の成果として見せてもらえるものがあると分かりやすい。
- ・ また、企業に入ってから導入教育があるが、美術大学出身者はディスカッション内容をまとめたりするのが上手。自分の作品の意図などを説明するトレーニングを受けているのかと思うが、自分が成し遂げたことを説明する力が身につけている。
⇒美術大学ではない上智大学の学生が、同様の力を身に着けるにはどうしたらよいとお考えになるか。(村田委員)
⇒ゼロベースから何かを作り出す経験を積める授業があるとよいのではないか。未来のありたい姿を考える力を養うための訓練となる機会提供が有効かと思う。(宮間委員)

(常盤委員)

- ・ 私が現在所属する美術大学では、そもそも自分が学びたいことを学ぶために大学に来ている学生が多いので、学修者本位の主体的な学びをおおむね実現できていると受け止めている。
- ・ 一方で、学修成果の可視化という点では、数値での評価が難しい。そのため、学生は講評会や発表・レビュー等の機会を通じて、学びの可視化をしなければならない環境に4年間置かれている。
- ・ 美術大学に限らず、一般の大学でも日々の活動において、学びの成果を可視化するための機会を作ってあげることが大事ではないかと考える。
- ・ また、コンピテンシーには「知識」「能力」「資質」の領域があると考えます。「知識」は講義でも獲得できるが、「能力」「資質」は正課教育だけでなく正課外教育も含めた両方の機会の中で育成していくことが大事だと考える。特に「資質」領域は非認知能力であり、体験を通じた学修活動等の機会が大事ではないかと思う。
- ・ 国の教育政策としても、中等教育では「知識」「能力」「資質(学びに向かう力)」の三領域を育成する方向性で進めていくことになっている。授業方法を考える際も、それらの要素を調和的に育成できるように進めていくこととなっているので、初等中等教育の流れも参考にするのもよいかもしれない。

(村田委員長)

- ・ 基盤教育と専門教育の接続や、コンピテンシーの設定、ポートフォリオ等による学修成果の可視化は、どこの大学も苦勞している点であるとする。
- ・ 一般の大学でやろうとすると、初年次教育で学生が何か課題テーマを設定して、4年間を通じて自分が設定した課題テーマを追い続けていくような学びの機会が今後重要となっているのではないか。
- ・ 中等教育では学習指導要領が変わって、中学校・高校では探求型の学習が行われるようになってきている。大学でも探求型の学修機会を整えていく必要があると考える。
- ・ 知識はどこにでも転がっているようになっている。今後は、デザイン思考での学びが重要であり、学生が自分で課題を見つけて、どう課題を解決するのか？ということを考える機会を提供していくことが重要。高等教育ではその点をやっていかねばならない。

② 多様な学生の受入れ・社会との接点

英語力のある学生の確保

(山本委員)

- ・ 上智大学は英語力のある学生の受入れで工夫がなされていると考える。他大学も国際系の学部も設ける等グローバル化に取り組んでいる中で、上智大学としてなぜ英語力のある学生を求めているのか？どのように学んでもらいたいのか？というメッセージをより具体的に示されるとよいのではないかと考える。
- ・ また、一方で、英語力のある学生に対してだけでなく、英語力の低い学生にとって上智大学はどうなのか？という点も示していくのがよいのではないか。

(常盤委員)

- ・ 上智大学が、学生の受け入れの時点で、英語力の高い学生を確保する取組をしている点は先進的な取組であると考えます。
- ・ 生成 AI の登場等、時代が急速に変化している状況の中で、なぜ英語力を身につける必要があるのか？という点を、受験生や学外に対してメッセージとして提示していくことが大事なのではないか。例えば、語学を学ぶということは、他の言語に立脚した思考力を持ち、複眼的な視野を得ることにつながるようになると思うので、単なる語学力ではない力を身につけることにつながるというメッセージを提示していくことも必要なのではないか。

(村田委員長)

- ・ 英語力のある学生の確保等、国際性の強化につながる取組については、上智大学は十分にリーディング大学だと考える。

カトリック校入試等の多様な学生受け入れの方策

(三好委員)

- ・ 特にイエズス会高校に対して特別推薦入学制度を設け、中学・高校・大学とイエズス会教育を継続して受ける機会を広げたことは、より善い教育の可能性に繋がると期待される。ただ、残念ながら私の所属する高校での推薦希望生徒は少ない状況である。上智大学について、地方ではまだその良さが十分には知られていないように感じる。
- ・ 推薦入学の決まった生徒に対して、大学の方から、高校の学習内容程度の課題が定期的に出されるケースがあり、受験勉強の必要のなくなった生徒にとってはよい学習機会になっている。入学前教育という点では、早く進路が決まった生徒に対して、多様な学びに触れる機会が与えられるのもよいと考える。

(村田委員長)

- ・ 多様な学生の確保という点でカトリック高校対象の特別入試等の取組をされている。多様な入試の実現という点では、カトリック大学であるという大学の特徴を活かした入試のあり方を検討しても良いのではないか。例えば、キリスト教主義は一神教主義であり、日本人の心性と異なっている文化を有している。カトリック大学として、そのような文化の違いを持っているのは、強みであると考え。現時点では、そのような文化の差異をあまり強調されていないので、もう少し強調してもよいのではないか。
- ・ また、一般入試利用率について、関西学院大学や上智大学は推薦入試を重視していて、一般入試で入学する学生の比率が少ない大学である。一般入試利用率が低いと、受験生からすると「入りにくい大学」という印象を持たれてしまうので、学生受け入れの方針を考える上では、一般入試利用率は注視する必要があるのではないか。

社会人学生の受入れ・社会人大学院の振興について

(宮間委員)

- ・ 社会人学生の受入れという点で、他の大学でも社会人大学院を設けて、受入れの強化を工夫している大学は多いが、上智大学の社会人学生の受入れは、特徴が見えにくいと考える。
- ・ 昨今は、リスキリングの流れがあり、オンライン教育でも様々な学習機会が充実してきている。オンラインで学べる選択肢が増える一方で、対面で学ぶことの良さもあると思う。リアルな学習の場という意味では、上智大学には立地面でアドバンテージがあると考え。
- ・ また、社会人が個人で社会人大学院に入学して学ぶ人の数はそこまで多くないと感じる。そのため、社会人学生の受入れを増やすという意味では、企業が社員を大学に派遣して学ぶような社会人教育の形態も充実するとよいのではないか。

(村田委員長)

- ・ 社会人大学院という話に関連して、私立大学では共通して大学院学生の確保に苦戦していて、定員充足率の低さが悩みとなっている大学が多い。一方で、国立大学も大学院振興策を取っており、大学院生の入学者確保に積極的に取り組んでいる状況がある。
- ・ これまで、大学院に進学する学生が多くなかったのは、卒業後の企業での待遇として学部卒業者・大学院修了者間で差があまり無かったという点はある。しかし、最近、大学院出身者の賃金プレミアムが高いとの研究結果が明らかになってきており、企業側も大学院出身の人材を評価するようになってきている。
- ・ これからの大学院教育では、企業が多く集積する東京で文理横断の教育環境を整えていくことが重要であるが、東京の中心にあって、1つのキャンパスに文系と理系の学部が揃っている上智大学は、社会人の大学院や大学院教育をする上でかなりの強みがあると考え。

- ・ 社会人教育という点では、企業が求めている教育のプログラムもあると思うので、大学のシーズと企業のニーズをどうマッチングしていくかという点も重要な課題である。大学側が企業側のニーズを捉えきれないと、企業は大学よりも、より実務的な教育を提供できる専門学校や専門職大学院等を選ぶ可能性もある。

(宮間委員)

- ・ 昨今の企業側の人材ニーズとしては、ICT や DX が分かる人材を求めている。企業内教育としても、ICT・DX が分かる人材を育成するために、1 年間かけて研修する機会を設けている。
- ・ 研修を受講する社員も理系出身者ばかりというわけではなく、文理半々くらいの構成となっている。企業内での状況を考えると、文理融合の視点を持ちながらも、ICT・DX 分野に明るい人材を輩出できるようなプログラムがあると大きな強みになるのではないかと考える。

(常盤委員)

- ・ 社会人大学院、特に修士課程については、進学動機として大きく2つあると考える。1 つは「学部時代に大学で学べなかったことを改めて学びたい」という動機と、もう 1 つは「問題発見・問題解決ができる探求的な取組をしたい」という動機だと考える。
- ・ 両者では学習の方法論が異なっているため、振興のアプローチも分けて考える必要があると考える。上智大学は立地の強みを活かせば、他大学に比べても有利に対応できるのではないかと考える。

(村田委員長)

- ・ DX のような、昨今のリスキリングの主な対象分野はスキル修得を目的としており、短期錬成型でのアプローチも可能であると考えますが、もう一方の問題解決・探求型の方は、正課学生として受け入れて、時間をかけて学ぶアプローチが必要だと考える。
- ・ また、大学院教育で一番大事なことは知識を得られるという点ではなく、コンピテンシーを養える点にあり、学び続ける力・学びを深める力を養う点であると考えます。
- ・ これからは大学院教育が重視される時代でもあるため、上智大学が強みを活かして様々な方策を実施していくことを期待する。

(常盤委員)

- ・ 知識の幅と学びの深さを両立して、学びの密度の濃い大学院教育をすることで、大学として提供する大学院教育の価値が高まると考えるが、幅広い知識幅と深い学びを得るためには、学部生の時の学習量が問われてくるとも考える。そのため、大学院教育を強化すると同時に、学部教育の実質化・強化も重要な視点である。また、偏差値で分類される

ような学歴ではなく、しっかりとコンピテンシーを身に着けた学生を輩出していくことが学部教育では求められると考える。

高大接続について

(三好委員)

- ・ 中等教育においては、能動的・主体的な学びが求められる中で、授業の形態がアクティブラーニング型に変わってきている。生徒は小学生の頃から、グループワーク等でアクティブラーニング型の授業を多く受けているためか、中学・高校に入ってきててもアクティブラーニング型の授業ではないと、集中力が保てず、学習意欲を示さない者が増えてきている。
- ・ 様々な学習形態がある中で、講義型の授業をしっかりと受けられる力も必要であると感じる。

(村田委員長)

- ・ 生徒・学生の中には「ギフテッド」と呼ばれるような異能的に能力が高い学生もいるので、そういった学生の個性を伸ばす学びも大事だと考える。
- ・ 例えば、大学教育の中でも、アントレプレナーを育成するための授業を行うことがあるが、学生のイノベーションを生み出す力と、課題を見つけて改善し続ける力の両方を育てていくことが必要となってくる。同様に講義を聞いて学ぶ力と、アイデアを出す力は別の力であり、その両方を育てていく必要がある。そのため、大学には大講義のような授業と、個性を生み出すアクティブラーニング型の授業の両方が必要で、それぞれで学生の個性を伸ばす学びが大事になると考える。
- ・ 私立大学には付属学校があるので、異能の生徒を見出して、どんどん力を伸ばすことができる環境を作れることが強みだと考える。

③ 内部質保証(PDCA)の運用について

全学としての内部質保証のための PDCA サイクルの運用体制

(山本委員)

- ・ 認証評価の観点で言えば、上智大学の内部質保証体制として組織している PDCA サイクルの考え方・体制については問題ないとする。
- ・ 一方で、PDCA の Plan 部分については、計画を施策につなげるための設計が見えにくいと感じた。おそらく、グランド・レイアウトという中長期計画があって、全学的な指針になっているとも考えているが、グランド・レイアウトを受けて、学部単位で実行する上での個別計画があるのか？という点や PDCA を回す際にはグランド・レイアウトに沿って点検評価が行われているのか？という点が気になった。
- ・ 内部質保証体制としては学部レベルでの PDCA をうまく回す仕組みとそれを全学の PDCA に作用させる仕組みを作ることが重要だと考える。明治大学では、学長が全学的な方針・計画(P)を示し、各学部ではそれぞれ何が出来るかを考えて自分たちの方針・計画(P)を出すようにしている。全学の P がしっかりしていると、学部の PDCA サイクルもしっかり回るようになると思う。

(村田委員長)

- ・ 教学マネジメントでは、評価をどう回すかというテクニックの部分に労力を取られてしまっていて、多くの大学で、認証評価のための評価となり、評価疲れが起きてしまっていると感じている。
- ・ 大学として時間をかけて議論して中長期計画を策定しても、学部の計画との紐づけができておらず、大学の P と学部の P がリンクしないまま PDCA が回っている場合もある。重要なことは評価のために PDCA を回すのではなく、PDCA の実質化を考えることである。
- ・ 例えば、関西学院大学では、大学の中長期計画にリンクするように、学部でも中長期計画を立ててもらい、同時に、学部長諸施策費という形で資金の手当てもすることで、大学としての P を学部の P とリンクさせ、D が機能するような工夫を取っている。また、年に 1 回は各学部での PDCA サイクルの工夫を報告しあう場も設けることで、学部での PDCA がうまく回るような仕組みを整えた。

(山本委員)

- ・ 内部質保証という観点では、大学の PDCA を回し、改善を進めていく上では、PDCA のキーパーソンを誰と定めているかが重要な視点である。
- ・ 例えば、教育の質保証では、カリキュラムの責任を持つ学部長・学科長が PDCA で果たす役割が大事となってくる。

- ・ 上智大学においても、アセスメント・リストを整備されて PDCA サイクルが実施されている。しかし、そのキーパーソンとなる学部長・学科長が、この取組をどの程度受け入れており、主体的に取り組まれているのか、という点が気になるところである。
- ・ 大学が提供している教育は、芸大生にとっての芸術作品と同じようなものであり、自分たちの教育を自分たちの言葉で説明していくことが必要だと考える。

教員(科目)レベルでの PDCA サイクルの運用に係る工夫

(常盤委員)

- ・ 大学の内部質保証の PDCA は全学レベルでの方針・計画、学部レベルのカリキュラム、教員レベルの授業科目という 3 層構造から成り立っている。「学部カリキュラム(P)」+「教員の教育方法(D)」が「学修成果」に直結するため、両者(P・D)のコントロールが必要であるが、現実問題としては専門性に依拠する教育のコンテンツ(P)のコントロールを全学レベルで行うことは難しいと考える。
- ・ そのため、教員レベルでの PDCA の回しやすさも考えて、教員レベルで共通の意識をもって改善に取り組むことができる「教育方法(D)」を中心として PDCA サイクルを考えるのがよいのではないかと考える。

(村田委員長)

- ・ そもそも教員の授業設計・実施は教員の自由度が高く、PDCA マネジメントとして、教員の科目レベルに関与することは簡単ではない。点検評価と言われると嫌がる教員も多いかもしれないが、科目レベルの PDCA では、学部が設計しているカリキュラムに沿って、教員に適切に科目を展開してもらっているかどうかが見ることが重要だと考える。

(宮間委員)

- ・ 大学と同じように、企業でも自社の経営理念に基づいて中期経営計画を作成し、各部門が中長期計画にリンクするアクションプランを作って事業を行っている。目標となる数字が明確になっている計画については、四半期単位で各部門が報告し、PDCA が回るような仕組みになっている。
- ・ また企業は、株主等の社外のステークホルダーに対して説明をしないといけないため、定期的に財務指標・非財務指標の両方について、計画や取組みの進捗を報告するような仕組みになっている。
- ・ 大学では、大学や学部としての P を個々の教員レベルの P まで落とし込むのは容易ではないという話があったが、組織全体としての目標計画を個人の目標計画レベルに落とし込むかは、企業でも大きな課題であると考えている。企業では、1 on 1 ミーティング等の取組みをして、会社としての目標を個々人の目標とリンクしてもらうための工夫をしている。

(村田委員長)

- ・ 企業では個人の目標管理制度がしっかりしているが、大学の場合、教員のしっかりとした目標管理制度がない場合が多いことも大学の課題であると感じる。

(常盤委員)

- ・ 教学マネジメントを考える上で重要な点は、現場の教員の進行管理だと考える。
- ・ しかし、教員が提供している教育コンテンツ自体をコントロールすることは現実的には容易ではないと思うので、大学や学部が目指している学生のコンピテンシーの育成の視点から、当該授業を通じて学生が狙い通りのコンピテンシーを身に付けられているのかどうか？という視点で、教員レベルでの点検評価を回していくことが大事ではないか。
- ・ また、教員レベルでの点検評価を通じて、ボトムアップ的に上がってくる評価結果を、大学として、どのようにまとめて、全体の PDCA としてまわしていくかという点も重要な視点である。

II. 意見交換

① 上智大学への期待等

(三好委員)

- ・ 最近の大学は、昔よりも学生の面倒見が良くなってきている印象を受ける。
- ・ 様々な事情や特性を持った学生が多くなってきているが、一人ひとりを大切にするという観点から、上智大学でも、そういった学生の学修・学生生活にしっかりと配慮をされていると思う。しかし、社会に出れば、厳しさに耐える力も必要になるので、大学の中でも配慮の観点だけでなく、厳しさを学べるような環境もあるとよいと思う。
- ・ For Others, With Others を生きる「仕えるリーダー」を育てるというイエズス会学校の使命を果たそうとする姿勢を、これからも大学として示していただければと思う。

(宮間委員)

- ・ 厳しさを学ぶという点では、社会に出ると自分とは異なる人々と接することを意識して、自分と相手との違いを受入れながら、違いや対立を調整していく力が必要となる。学生時代の経験の中で、そういった力を身につけてもらうことも重要だと考える。
- ・ 最近の学生は、すぐに正解を求めて、間違いを恐れる学生が多いような印象を持っている。正解がない世の中になってきているため、正解を求めるのではなく、それを考えるような力が必要だと考える。
- ・ また、AIが登場してきて知識や情報が簡単に手に入るようになってくる中で、問われてくる必要な力とは、論理的に思考する力だと思う。ひいては論理的な文章を書く力も重要と考える。

(常盤委員)

- ・ 上智大学の特徴としては、やはりグローバル面での教育の取組が特色になるかと考える。その点を強みとして今一度、自学の特色や強みを積極的にアピールされるのがよいのではないかと考える。

(村田委員長)

- ・ これからの大学教育では、正課のみならず正課外活動を含めて、学生のコンピテンシーをどう育てていくかを考えていくことが大事だと考える。その意味で、全体的な取組としては、上智の教育は進んでいると考える。グローバル教育に関する取組は先端的であり、また、基盤教育も創意工夫して取組を進めている印象である。
- ・ 現在、上智大学が抱えていると認識されている課題は、どこの大学も共通して抱えている課題でもある。学生のコンピテンシーをどのように育てるかが問われていく中で、今後上智大学がどのような取組をされるのかを期待したい。

- ・ 理系人材の重要性が認識されており、今後、理工学部改組転換が必要ではないかと考える。

(以上)